

平成23年度「重点研究費」研究成果報告書

申請区分	C	配分額	483,000 円
研究課題	多文化教育の教材としての多文化国家アメリカ		

研究代表者

氏名	林 邦夫	所属	人文社会科学系 人文科学講座	職名	教授
----	------	----	-------------------	----	----

研究分担者

氏名	菅 美祢	所属	人文社会科学系 人文科学講座	職名	准教授
	小澤英実		人文社会科学系 外国語・外国文化研究講座		准教授

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字)

林は、アメリカ人作家でスペインに関する多くの著作を残したワシントン・アーヴィング(1783-1859)を取り上げ、かれの作品の成立に大きな意味を持ったと推測されるスペインへの旅について研究した。この旅行の期間、アーヴィングは日記を残しており、また書簡も書き送っている。これらを基礎資料としながら、かれの有名な著作『アルハンブラ物語』の舞台となったスペインの古都グラナダに滞在した時期に焦点をあわせて、かれの行動を逐一明らかにし、グラナダの風景の実見、住民との交流、建築物の鑑賞、歴史上の人物の肖像画との出会い、古戦場などの旧跡訪問などについて探求した。こうした体験とその作品の記述を比較することによって、グラナダ滞在とそこにおける取材が作品の成立にどのように関わったのかについて考察した。これによってアーヴィングというひとりのアメリカ人が、その歴史からイスラーム文化の陰影の色濃く残るスペインという異国についてどのような印象を抱き、感興をおぼえたのかを明らかにしようとした。これは異文化理解を通して多文化教育のひとつの教材となるものと考えており、その成果は講義などに活用していく予定である。

菅は、建国当初の1790年から開始された、アメリカ合衆国の連邦センサスにおける「人種」(当時の語彙では「カラー」)の分類が、1850年以降、中国人を皮切りにアジア系移民が増加していくなかで、「ブラック」と「ホワイト」の二分法の分類軸からどのように多文化的様相を呈していったのか、また、そうした多文化的「人種」分類軸構築の基礎的データとなった、調査票(個票)における「人種」分類のあり方を、「白人性(ホワイトネス)」の境界の観点から分析した。具体的には、多文化的センサスの出発点として1850年連邦センサス、および1852年カリフォルニア州センサスを位置づけ、「中国人」に対する「カラー」の記載の変容を追うことによって、その過程の歴史化を試みた。菅の講義においては、最新の2010年センサス・レポートを教材としているが、本研究は、増加著しい「ヒスパニック」、「アジア系」、そしてオバマ大統領がその象徴的存在となった「複数人種(マルチレイシャル)」の回答の増加傾向など、今日の多文化社会アメリカの歴史を理解するための土台となるものであり、菅が駆使しているデータ・ベースの史料やその他の史料の収集方法についても、本研究で得た知見を学生に還元したいと考えている。

小澤は、アメリカ文学に描かれる黒人と白人の対立構造を中心とする人種概念の時代による変遷、とりわけ白人作家と黒人作家による<語り<の位置>の共通点と相違点を、具体的作品を事例に考察した。白人と黒人を隔てる想像上の境界を無効化する語り、第三世代の黒人文学から登場していることを、エドワード・P・ジョーンズの『地図になかった世界』(*The Known World*(2004))をもとに例証し、その対比としてウィリアム・フォークナーの『行け、モーセ』(*Go Down Moses*(1942))を中心とするヨクナパトーフア・サーガにおける<内なる他者>としての黒人の表象が地続きにあることをあきらかにした。また、約六十年を隔てる両作の共通点である、「南部的想像力」「偽史」「架空の土地を舞台とした地理生成」の三点が、「アメリカ文学における人種の境界の生成」と「アメリカという国家の生成」に繋がっていることを分析した。本研究は、脈々と受け継がれるアメリカ文学史の系譜と、学生に理解しづらい人種概念と奴隷制の多面性、ひいてはアメリカ国家を読み解く最適な事例であり、本研究は学生にとり、真の異文化理解に繋がる教材であると確信している。

研究成果発表方法

林邦夫「ワシントン・アーヴィングとグラナダ」『平成23年度東京学芸大学重点研究費報告書 多文化教育の教材としての多文化国家アメリカ』所収

菅美弥「1850年代のセンスにみる『チャイニーズ』の『カラー』の境界」同上所収

小澤英実「エドワード・P・ジョーンズとウィリアム・フォークナーにおけるアメリカのカルトグラフィ」同上所収